

よりよい社会の創造を導く 「かっこよさ」の作り方

中野香織 (服飾史家)

世界のファッション都市で開催されるコレクションの報道において、ショーの内容は中心的な関心事であろう。しかし、世俗の興味はむしろ、「だれがフロントロウ(最前列)に座っているのか?」ということに向かう。

サングラスをかけたボブヘアのアナ・ウィンターは「センター」扱いで、両隣に誰がいるのか、会場にはどういう「新しい」人が登場したのかという生々しい「人」の動きが、ファッション界隈の話題となる。ちなみに近年は韓流スターや韓国インフルエンサーに焦点が当たること増えた。ショーの出席者、とりわけフロントロウの動向を見れば、いまのファッション界において影響力をもつ人が誰なのかがわかるというわけだ。

外見の主張が強めのファッションニスタに埋め尽くされる空間で、長年にわたり、フロントロウで別格の存在感を発揮し続ける人がいた。祭司と見まがう荘厳なローブやカフタンをまとった長身巨躯の黒人男性である。「誰もが知っている」という前提で扱われるその人は、豊饒なボキャブラリーを駆使して張りある声で語り、唯一無二の風格で周囲を魅了し、場に活気を与えるファッションアイコンだった。

その人の名こそ、アンドレ・レオン・タリーである。

1948年生まれのアンドレは、ファッションジャーナリスト、エディター、スタイリスト、テレビ番組のホスト、そしてファッションアドバイザーとして、ほぼ40年間にわたりパリおよびニューヨークのファッション界で主要な役割を果たしてきた。1970年代後半には「WWD」誌パリ支局長に抜擢され、「パリの王様」と呼ばれるまでになる。1983年にアメリカの「ヴォーグ」誌で働き始め、1988年には「ヴォーグ」誌初のアフリカ系アメリカ人の男性ディレクターに就任、98年から2013年までは同誌のエディター・アット・ラーズとして活躍した。第44代合衆国大統領のバラク・オバマとミシェル・オバマ夫妻のスタイリストも務めている。生き字引とも呼ばれるほどの知識と経験をもつアンドレは文芸も手掛け、「シフォンの壱塚」という回顧録は「ニューヨークタイムズ」のベストセラーリスト入りしている。2020年にはフランスから芸術文化勲章(シュヴァリエ)を受勲。「メットガラ ドレスをまとった美術館」はじめ数多くのファッションドキュメンタリーに出演し、「プラダを着た悪魔」ではスタンリー・トゥッチが演じたナイジェルのモデルになった。2022年に73歳でこの世を去ったときには、ミシェル・オバマ、ビヨンセはじめ多くの著名人が弔意を表明した。

つまり、アンドレはファッション界の権威にして文化的アイコンであった。さらに、アフリカ系アメリカ人にとっては、レジェンドでもある。クチュール界のネルソン・マンデラ、服の世界のコフィー・アナンとも喩えられた、主流カルチャーの領域で成功した黒人の英雄である。まだ人種差別が根強く残る時代に、白人が圧倒的優位を占める洗練された世界で、黒人で巨躯の男性が趣味の裁定者としてパリコレクションのフロントロウに座る。そのことじたいが、多くのアフリカ系アメリカ人にとっての希望となり、すべてのマイノリティにとっての「リベンジ」となった。映画にも出てくるセリフだが、「成功は最高のリベンジ」



なのだ。さらに、黒人男性のステレオタイプを覆し、黒人男性といっても多種多様であることをアンドレは世界に示した。21世紀に開花する多様性の時代を早くから準備した象徴的存在である。イギリス版「ヴォーグ」誌の現編集長、エドワード・エニンプルは、同じ黒人の男性としてインスタグラムで彼に弔意を表した。「あなたがいなければ、ぼくは存在しなかっただろう」と。

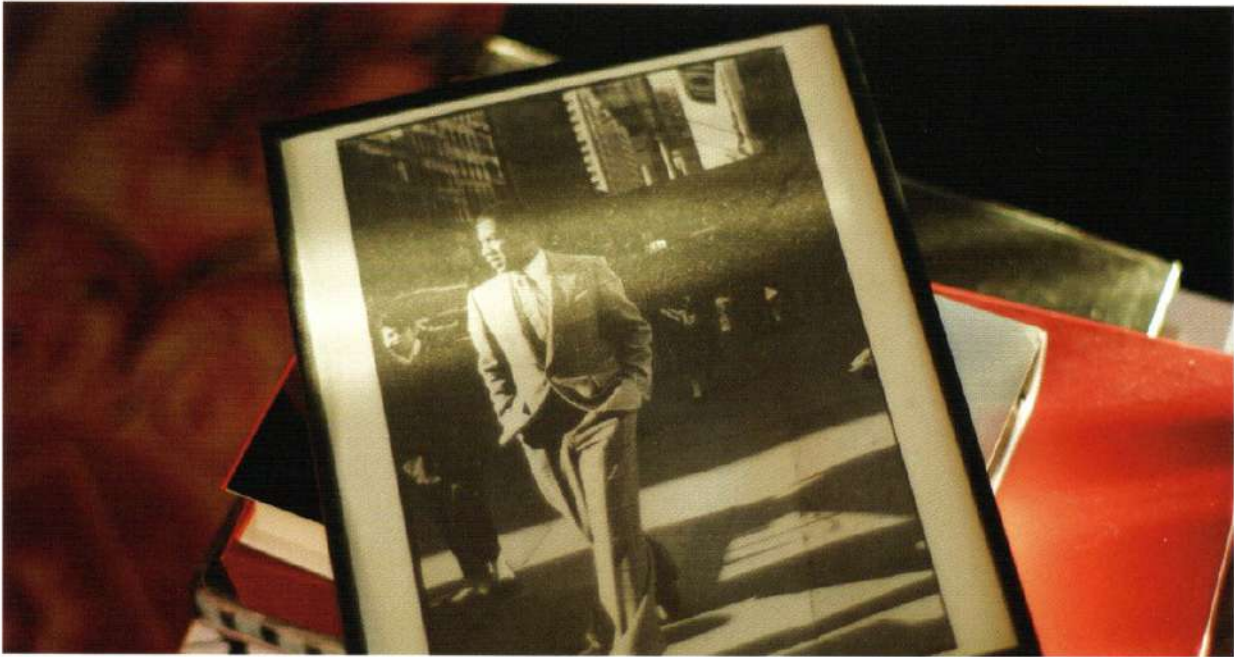
なぜ彼はいくつもの差別的ハンダをものともせず、型破りな成功を取めることができたのか？ ドキュメンタリー「アンドレ・レオン・タリー 美学の追求者」は、アンドレがファッション界の頂上に上り詰めていくプロセスを、同時代の貴重なアーカイブ映像や業界の主要プレイヤー、関係者のインタビューを織り合わせながら辿っている。

アンドレはアメリカのノース・カロライナ州で生まれた。人種差別が根強く残る環境で、裕福ではない質素な家庭に育ったが、祖母により「行動で暮らしを豊かにする」ことを教えられる。メイドをしていた祖母から無償の愛を受けつつ「ラグジュアリーな心のあり方」を養い、「貴族の生き方」を学び、黒人教会で「サンデーベスト（日曜日に着る晴れ着）」を着る習慣からファッションやスタイルへの関心を育てていった。あからさまな差別のある現実から逃避して、理想の美にあふれた「ヴォーグ」の世界に没頭した。

このような青少年期の過ごし方こそが、その後のアンドレのキャリアを創る揺るぎない基盤になっていることがよくわかる。アンドレが人種や外見にまつわる偏見をあっさり超越してファビュラスなのは、堂々と貴人のように振舞うからだ。そのように振舞い続けられれば周囲もそのように扱うようになるものだ。そもそもアンドレが貴人のように振舞うことができる根拠は、幼少時の環境でつちかわれた自尊心と自由な想像力である。彼に品格、誇り、尊厳、礼節を教え込み、日曜日に特別な服で装う喜びを教えた黒人コミュニティの本質的な豊かさを、ケイト・ノヴァック監督は優しいまなざしで伝える。

とはいえ、実際には、アンドレは多くのアフリカ系アメリカ人の例にもれず、残酷な誹謗中傷を経験している。なかでも「クイーン・コング」と陰で呼ばれた卑劣な中傷のエピソードを語るアンドレの涙には、見ている方も心を痛めつけられる思いがする。これはおそらく氷山の一角で、語られなかった多くの苦難をアンドレが乗り越えてきたことは想像に難くない。

心の傷を隠し、アンドレは頭を高く上げ続けた。「シフォンの壟壕」たるファッション界の戦場からアンドレを守ったのもまた、自尊心だった。努力で勝ち得た圧倒的な知識と能力が、彼のプライドの根拠になった。「ヌメロ・ロシア」誌で1年間編集長を務めた際、この雑誌が自分に何を求めているのかを分析するアンドレの言葉に次のような表現がある。「与えられた役割の枠組みのなかで〈ゾーン〉や〈禅〉のようなものを作り出せる私の知識と能力を求めているのです」。だから、不当に傷つけようという輩がいようと、同じ低いレベルでは戦わない。品格を保ち、自分で自分の尊厳を守り抜く〈禅〉の



高潔さにフォーカスしたところこそが、アンドレが「塹壕」で生き抜くことができた最大の理由である。下劣な差別を跳ね返し、貴人のように振舞うための戦闘服こそが、宗教的な雰囲気すら漂わせるローブやカフタンだった。トム・フォード、カール・ラガーフェルド、ヴァレンティノといった一流デザイナーの友人が、彼のために衣装を作った。

このようなアンドレの自己規定や社会に対する向き合い方、振舞い方は、アティテュードと呼ばれるものだ。ファッションにおいて、最も重要な要素である。富や美貌や人種の格差において、暗黙の裡に「下」とされてきたものが逆転のチャンスを開き切る鍵がここにあることを、アンドレは教えてくれる。世間の価値基準を転覆させ、新しい視点をもたらすようなアティテュードの持ち主は、一目おかれる。アンディ・ウォーホル、カール・ラガーフェルド、イブ・サンローラン、そしてダイアナ・ヴリーランドといった錚々たる人々がアンドレを引き立てたのも、まさにそれゆえだ。彼らもまた世間の常識を覆すようなアティテュードの力を発揮し続け、それをスタイルに昇華させて不動のステイタスを勝ち得た人たちである。

なかでも、元「ヴォーグ」編集長で1971年からメトロポリタン美術館衣装博物館の館長を務めていたダイアナ・ヴリーランドは、その力を最大限に駆使して数々の流行を創り、スターを生み出したパワープレイヤーである。ぼつりした唇を欠点とみなされたミック・ジャガーも、モデルの標準美から大きくはずれると揶揄されたベネロペ・ツリーも、ダイアナのアティテュード・マジックで個性美をもつスターになった。「鼻がすなりとしてなくても、優雅な物腰さえあればまったく何の問題もない」とは彼女の名言のひとつである。

自身をとりまくコンテキストをすべて理解し受け入れたうえで、自分は何者なのかを規定する。そのうえでドラマティックに振舞い、周囲に視点の転換をもたらすというヴリーランド流のアティテュードの作り方を、アンドレは助手として身近に学んでいる。後にアナ・ウィンターが「ヴォーグ」の編集長に就任したとき、アンドレは彼女の右腕となった。アンドレの庇護者と言われたアナは「いや、私が彼から学んでいた」と語っている。ダイアナ・ヴリーランドからアンドレへ、アンドレからアナ・ウィンターへと、スタイルの奥義が継承されているであろうことが感慨深い。

さて、日本では自己肯定感を高める学校とやらまでできて、少なからぬ人が自信のなさに悩んでいると報じられている。均質な社会であるがゆえに、同調圧力が強く、ひるがえって、つい人と比較してしまうがゆえに揺らぐことも増えるのかもしれない。人種差別という大きなハンデがある環境で、前例も比較対象も知らず戦わなくてはならなかったアンドレは、皮肉なことだが、かえって幸運だったようにも見えてくる。格差のあるなかでの立ち位置を知ったうえで自分の尊厳を大切に、他人を敬い、貴人のように振舞う。結果として、人種や外見にまつわる社会の偏見まで覆し、より包摂的な社会の創造を促していく。「かっこいい」とはそういうこと、とアンドレは教えてくれる。